
女王様の涙

菜乃葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王様の涙

【NZコード】

N3435D

【作者名】

菜乃葉

【あらすじ】

いつも泣かないあの王女様が泣いてしまった！？私はその様子に驚き、慌ててしまう。いったい王様になにが起こったの！？

(前書き)

この小説はグループ小説第十六弾、視点の変わる小説の企画に参加
します。

私が女王様付きの侍女になつてから早数年がたつた。
我が国の女王様は気が強くてわがままだ。

こうといったらその意志をまげることなんてない。
男勝りで凜としていてとにかくかっこいい。
そんな女王様に私たち侍女はとてもあこがれている。
しかし、こんな女王様は初めて見た。

あの女王様が泣いているのだ。

「ラルクさん、いつたいこれはどうなつているのでしょうか？」

こんなことは初めてなので、何をすればいいのか分からず部屋の前をうろついていたら、私の前に料理長のラルクさんが通りかかった。

ラルクさんはなかなかの男前として侍女達には評判だ。
なんでもその切れ長な目と高い身長がいいらしい。

「とりあえずおちつきなさい、メイファ。女王様だつたら大丈夫ですよ」

なかでは、女王様と旅人が話をしていたはずだ。

侍女の役目として扉の前で私は見張りとして立っていた。

しかし、急に女王様が泣き出してしまった。

ラルクさんはその様子に気づいても平然としている。

彼は私とあまり歳は変わらないはずなのに、どうしてこんなにもおちつきに差が出てしまったのか。

「いいえ、この状況だと私はおかしくない。彼のおちつきの方がおかしいはずだ。

「なんでおちついてられるんですかあ？ これは一大事ですよ！」

思わずまぬけな声が出てしまった。

それを聞いてラルクさんは笑い出した。

「女王様の涙はうれし涙ですから。それよりもここを離れた方が女王様達のためにもなりますよ」

なんのことだかさっぱり分からない。

自分で理解していくと笑っている様子に腹がたつた。

すると理解していないことが分かつたのか、ラルクさんは私の腕をひっぱって中庭の方向へと向かつた。

「ここならもう話しても平氣でしよう

やつとラルクさんに手を離してもらう。

けれど、そんなことよりもなぜ泣いていたのかが気になる。もしかして、

「あの旅人が女王様を泣かせたのでしょうか！？」

そうだとしたら一発殴らないと気が済まない。

よし、今からあの旅人の所へ行つて殴つてこよう。

私は回れ右をして女王様の部屋へと向かおうとした。

「ちよつと待つてください。確かに女王様が泣いていたのは旅人が原因ですが、さつき言つたでしょう。あの涙はうれし涙だつて」

ラルクさんは落ち着いた様子で私を説得しようとする。
でも納得いかない。

「じゃあ、なんで女王様は泣いていたんですか！？」

私は旅人に対して怒つていたので、ついついラルクさんに向かつて怒鳴つてしまつた。

だつて、女王様はとても強くて氣高くて。泣いた姿なんて一度も見たことがない。

ラルクさんは私の声があまりに大きかつたからなのか、耳をふさぎながら説明をしてくれた。

「女王様は、ずっと待つていていた旅人に会つことができたんですよ。きっと今頃は再会の喜びに浸つてていると思うので、そこを邪魔してはいけませんよ」

その後も事細かにラルクさんは説明をした。

なんでも昔旅人は城へ来て女王様と恋に落ちたんだけど事情があつて去らなければいけなくて、これが久しづびの再会で……。

聞いていたら、だんだんと悲しくなり、私も女王様と同じように泣きそうになつた。

「……ですから、今は。つてなんで泣きそつなんですか！？泣かないでください」

ラルクさんはとても困った顔をしていた。それはそうだろう。いきなり私が泣きそうになっているのだから。

「悲しいんです。……ラルクさんはあの2人のことを知っていて、なのに私は知らなくて。私は女王様の侍女を何年もやっているのに涙があふれてきました。それほど悲しかったのだ。私が女王様のことを知らなかつたことが。

「いんなんじや、女王様の侍女として失格です。もう侍女をやめます！」

なんでこんな結論になつたのかは自分でも分からないが私は侍女をやめようと決心した。

次から次へと涙があふれてくる。とにかく悲しくて、くやしくて。

「やめる必要なんてありません！」

そばで大きな声がして驚いた。あのいつもおちついているラルクさんが大声をだして、おちつきがなくなっている。

「僕はメイファにやめて欲しくないです！僕は、メイファの」とが好……

何かを言いかけていたラルクさんが急に頭を押されてその場に座り込んでしまった。

ラルクさんのそばにはなぜかボールが落ちている。ふと周りを見回してみると、

そこには女王様がいた。

「こら、ラルク！ あんた私の大事なメイファを泣かせるな！」

女王様がラルクさんにボールを投げたことが分かった。

彼女はこちらへと走つてくる。

「女王様！？ いつたいどうなされたのですか？」

もう涙なんてとっくに乾いていた。

女王様はずいぶんと怒つているらしい。今にもラルクさんを殴つてしまいそうだ。

「メイファ、大丈夫？ なにもされてない？」

私のそばまできた女王様は、私のことを心配しているようだ。

「別に何もされていません。大丈夫です、女王様」

「そ、う、でもあなたが泣いているようだからここにきたのよ」

女王様は私のことを気にしてくれている。そう思うと私の悲しみが薄れていった。私の顔が笑顔になつていいくのが分かった。その女王様はもう私の知つている女王様だった。

そのことにほっとする私がいる。

「じゃあ、なんであなたは泣いていたのよ」

女王様は不思議そうにしていて、私に理由を尋ねてくる。
私は答えにくかったが、女王様の質問なので答えないわけにはいかない。

「実は、私は女王様のことを何も分かつてないことに気がついたんです。それで侍女をやめなければいけないと思い、悲しくて泣いてしまいました。ラルクさんはそれで私を慰めようとして……」

…

そこでふと思いつだし、ラルクさんを見てみると、彼はまだ座り込んでいた。

そうとう女王様の投げたボールは痛かつたらしい。
彼を助けようとしたときに女王様が怒つたように私に言った。

「馬鹿ね。あなたにやめもらつたら、私が困るのよ。私はメイファのことが気に入っているんだから」

私は感動して、また泣きそうになってしまった。

もう、私は侍女をやめるなんて言わない。一生この女王様についている。

そう決心した。

「そういう、メイファに旅人を紹介したいから、ついてきて」

「はい！」

女王様はとても嬉しそうに『旅人』という言葉を言った。
女王様が嬉しそうだと、私まで嬉しくなつてくる。自然と返事の
声も大きくなつた。

女王様としてではなく、1人の女として彼女は旅人のところへと
走つていく。私もそれへと遅れないようについていった。

だって、私は女王様の侍女だもの！

……女王様のそばについていられることが嬉しくて、中庭にラル
クさんをおいていつてしまつた。

何か私に言おうとしていたけれど、いつたい何だつたんだろう？

(後書き)

初めてグループ小説に挑戦しました。
なかなか難しいですね……。
今度挑戦するときはもっとうまくできるようになりたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3435d/>

女王様の涙

2010年10月22日00時51分発行